

## 卷頭言——刀筆の吏——

小役人を指す言葉に「刀筆の吏」というのがある。辞書によると、まだ紙のない頃、竹簡に筆で記し、誤字は小刀で削ったところからこの語が出来たというが、紙が流布してからでも刀筆は下役必携の道具であつたろう。

私が昭和二十四年に東大史料編纂所に入った頃、大日本史料の原稿は和紙に毛筆で記すことになっていて、校正には朱筆を用いた。だから誰もが硯と筆墨を備えていたし、原稿作成の折には、史料の補入や排列の変更などの必要が頻繁に生ずるから、切貼りの為の鋏と糊は手離せなかつた。さすがに後では原稿も洋紙にインキで書くようになつたが、鋏と糊は相変らず必需品であり、殊に私などはカッターを愛用して、字を削つて書直すようなことにも使つたから、正倉院文書のおびただしい切貼りの痕や、紙をすかして見なければわからないような巧妙な字の削り痕などを見る度に、何とも言えない親しみを覚えて「刀筆の吏」を連想したものである。

以前は紙が頗る不自由だつたから、反古の利用は日常のことであり、史料編纂所でも、昇給通知などの書類は昔の書類を小さく切つて、その裏に記して渡していた。またシベリヤ帰りの友人から、シベリヤの貧乏村役場では、中央に転がしてある大きな一連の巻紙から、めいめいが適当な大きさの紙を切つて来て、丁寧に野を引き、さてその上で書類作りに取りかかるのだなどという話も聞かされて、とにかく千二百年前の正倉院文書の世界が至つて身近に感ぜられたのである。当時の役人にとって正倉院御物にあるような刀子が必携の道具だつたことは多分間違いないところであろう。

正倉院文書の続々修などの中には、本来のものと思われる木軸で、いかにも不細工な削り方をしたものもある。これなどは

役人が、当座の間に合せに小刀で削って作つたのであろう。一方では、木を丁寧に削つて見事な軸を作つて喜んでいた者もあつたかも知れない。

木簡が、まとめてほぼ同一規格で作られたこと也有つたろうし、また折にふれてその場その場で作られたこと也有つただろうことは、言うまでもない。そして下役人が皆大てい刀子を持っていたとすれば、木簡を削つて字を書直す姿もごくありふれたものだつたかも知れない。

ただ、木簡の出土に際しては、必ずかどうかは知らないが、大量の削り屑と共に出て来る場合もあるようである。その場合、それらはどういう捨てられ方をしたのか、毎日のように出た屑がきちんと一定場所に集められたのか。それとも何かの区切りに、まとめて大量のものが始末されたのか。その辺の具体的な姿が浮んで来たら面白かろうとも思う。

(土田直鎮)